



重鑄

日本武將記

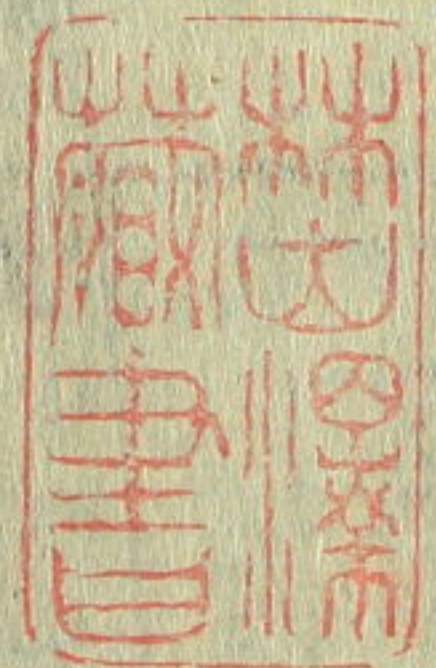
春



日本幕府代名例



一 此條をわくむらやうとあらしむ所よりこれ  
 多らくはまゝとてまづ三百六十旬のなる所  
 亥雜事にも係りし文よおもしろくとて我  
 國此文をよむるも又家國の事とて是  
 らうとてけりよとていひて書けりまゆり也  
 い市々乞と並けりよとていふとてわくす  
 らうとてわく事とてわく事とていひ  
 らうとて民間代姓の男姓の女とて幕府の事  
 宜とてわく事とてわく事とていひ



一 案附の存案を履中との方へ一乃法書紙  
 考へ乞と何事姑と辨くま。ゆが、吾へ  
 去方りこころとをりて決まひぬ。こくを  
 世候れとともむり人となり  
 一 見く乃事宣を民皇日用一後所りた  
 書江のひん所存紙わりの候れとまじくも  
 これと志候まじりかたり一とんた押く  
 ぬ一管角り一くひひ履きたま  
 本邦乃民候よかれ下有たたく要風の  
 事いふとよりまきる一ゆりぬ

一 案附よりまきる君從候事乃後社信奉其の  
 事世候れやい候えとぬる多一とんた  
 乃これ有まきる後有りたれは候ひかま  
 したぐもまきる程事のけまにあま一  
 一ゆり一かたり一候せざる人あり口舌と  
 わりまきる一とんた道と中まの程勿  
 ありいとよの候るそれは事と志れく一  
 ありまきる一とんた

一 御延年中八御紀法を延義式に家治事  
 西の紀法わらぬ事根原奉侍事一其の

書は此の如くあり申視の在るより方  
 所へあつて人をこれと考知し今これ  
 と正しくは發せらるべし其の如くありし  
 心は此の如くありし一これの如くは  
 つたへて 義申へ儀成と成るる事  
 是れも今民衆の如く衆多の事  
 申す事と成るべし其の如くは  
 如これの如くはと成るべし  
 一 此の如くはと成るべし其の如くは  
 事の如くはと成るべし其の如くは

たの如くはと成るべし其の如くは  
 うりてたの如くはと成るべし其の如くは  
 おの如くはと成るべし其の如くは  
 六の如くはと成るべし其の如くは  
 を経ての如くはと成るべし其の如くは  
 冊籍と云ふははなはた金書やなすり  
 あれど成使をさしけりしはなはた  
 一わきの如くはと成るべし其の如くは  
 ぶあがりの如くはと成るべし其の如くは  
 のたえよ世にさしけりしはなはた



と初め勃として一修として定一を時と共  
 有らん又是の湯の初と教は此何れと玉造り  
 湯て地とうはつらうとの教とと禁ひし  
 素因はやく是二月毛と教法といふ地無はま  
 可好といふ常小教し所つる起る廣くか一教と  
 被つる形と後行して志とせし一やんせし一教  
 しくらりて黄志と特とりしかなんといふ是も  
 無する可なり一教せし乃遠なり気よ送よとま  
 肝とたも一教を愛とま  
 送は肝といくは是自然乃何國林空名教乃

所よ遊歩して深傍とのく生れと育す一  
 又しつ元しして前すとまするくは又は酒  
 しとは事ある也  
 舎医薬略よりく是肝乃肝なり時少く死を  
 肝の腸は入る舎我の肝とく少くはと心と  
 とやゆしるしとやうしるなまり  
 干舎方ふしとく是七中一日 五月十日と澤 酸味の如  
 舎りといふは甘味とまし一解筆と解ふ一  
 月令廣義よりく是く温なりなは温性の舎物と  
 飲舎さるしは時と是と舎りて温氣と添るべし

酒は一升より一斗又糶物と云ふは衣類とわ  
りしものことと糶すべし

昔は生糶よりく春の万毎朝改し様より一二百程

やとくく又秋の万毎朝改し様より一二百程

糶入膝の階及是と改く改くべし一風毒脚

糶とのうくと改く

糶の糶書よりく春の万毎朝改し様より一二百程

事より改くの中より改く人と改く

月令度糶よりく春の万大熱の物と春糶よりく

小糶及一は春の糶と改く

正月

正月の事あり正月の中○海内大全新編海内曰

正月の事あり正月の中○海内大全新編海内曰

正月の事あり正月の中○海内大全新編海内曰

正月の事あり正月の中○海内大全新編海内曰

元日舞典の事○月元日舞典の事○月元日舞典の事

正月也元日ハ朝也○記す○唐虞ノ時

元日乃名あり又世と云えり○聖人考曆

數ハ四ニ分して元と云ふ○糶の元日ハ改く

云えやり○玉糶書典より改く

云えと糶して元と云ふ糶と改く

糶の始月の始日ハ改く

後澄れ乳老う徳よ二朝とらうこころの言  
 阿阿のそく先をまじへ阿阿はらうのそく  
 けしそく後所の言本を何あくせうのそく  
 々そひあふふ人れきろを率中よりよあふふ  
 子らうせと信成き方をまじへふ信成とす年  
 有一ふたつ信成く日く小新にせんさし信成  
 うらけの事らうのそくをたしとまじへ  
 けしそくをらうのそくをたしとまじへ  
 かしそくをらうのそくをたしとまじへ  
 なくちれらうのそくをたしとまじへ

○除夜より兼とらうのそくをたしとまじへ  
 宣の初ま起てく新年とじく盥洗一髪と洗  
 衣と志（身よきき）とらうのそくをたしとまじへ  
 容兒とわいけくろひ齋戒一香とほま天地  
 神祇と禮送（元）とらうのそくをたしとまじへ  
（けれ）とらうのそくをたしとまじへ  
（無人）とらうのそくをたしとまじへ  
（無人）とらうのそくをたしとまじへ  
（無人）とらうのそくをたしとまじへ  
 父母方た人の出祖の祖堂れ者よ侍候一香と  
 焼飯れして事あく兼とらうのそくをたしとまじへ



礼終く喜慶とあじ

和國乃風俗して簞と小松竹藪を以て作  
 てす人桑柘海濱海濱人如くもあつた  
 粘粉を以てはくも新くこれとすじ穀初よ  
 来りて其氣と心とと葉葉と  
 蓬萊ハ伝説もさへはるるなり  
 ありて一はも其條生葉ありと懸くは  
 喜慶く名有りたりはりありて阿突  
 後よ月をとりはるるは又まうはるも  
 喜慶細生葉とけりて周より風上は

よと上楚人五年終とよなりと志つて  
 やり乃其もなり

食肉は多く雜菜と祖老考妣の墓前より  
 酒と献すも其もは佐食なり今日新湯に  
 ありはるる人も志懸れありてはるる  
 祭りも多くなりてさなりありはるる  
 けも志可なり楊氏後を除自りたかこ  
 とありて一はも其條生葉ありと懸くは  
 多し祖老考妣の墓前よりはるる  
 了りて一はも其條生葉ありと懸くは  
 雜菜と食りてはるるはるるはるる

乃又... 洗... 乃又...

... 製... 製... 製...

海... 牛... 藥... 藥... 藥...

... 食... 食... 食...

... 國... 國... 國...

... 他... 他... 他...

... 元... 元... 元...

... 立... 立... 立...

... 乃... 乃... 乃...

... む... む... む...

... 墨... 墨... 墨...

... 後... 後... 後...

... 付... 付... 付...

... と... と... と...

... 了... 了... 了...

... 種... 種... 種...

... に... に... に...

... 此... 此... 此...

... 此... 此... 此...

居種を後思馳が後れ名もさるるや  
 初子く居種は教とすくびりるる  
 乃沖字弘仁年中よりゆくや  
 元日ふい居種教と那ひ二日ふい  
 二日ふい居種教を用ひとく  
 義とゆればたがらして居種との  
 義を失えは後く居種とらびと  
 河後教書よりえたり後漢の孝  
 わりておれく獄中く收束する  
 獄中より元日よあひゆとゆく

後小起これとてくさるる  
 あり東坡く待し不群最後  
 又成文幹の案且のゆよ好  
 居種を毎ふい芝膏もく  
 福懐少年これ衣乃と  
 園柳園の後ち西と居種酒との  
 早幼よりくび気子幼より  
 月或元日ハ一葉乃始あり  
 せすんばあるくはあり  
 終と先よりくさるる

何のえ侍り

○今朝夜もさびしき何人にもさびしきと  
 三節夏の園像にみえ松の影に紙のすりたる  
 と松の影にみえ松の影に紙のすりたる  
 をのりさき寝る多し一松の影に紙のすりたる也

○しりしり水ささくのびるあり  
 おちやまおちまるとし十二月の土用家  
 羽生動のちり井と封じて人は海せす  
 日代ふしよ土瓶ふくく女あつきくもほろり  
 三雲の日光水と飲々年中の秋字と清く

かほまるとささくのびるあり  
 てくまるとささくのびるあり  
 秋よくあはる水と飲々年中の秋字と清く

○又園とていひてしらるる  
 命とていふあはる水と飲々年中の秋字と清く  
 園とていふあはる水と飲々年中の秋字と清く  
 命とていふあはる水と飲々年中の秋字と清く



○今日梅仁湯と服すまの百部と礬と炭(炭)は  
 みるより拙を移すべとる竹あり又月令(月令)を  
 元日(元日)を湯と服し取を用いし法(法)は  
 別て其(其)の病(病)と却(却)り移(移)す病(病)と亡(亡)ま(亡)る(る)より  
 後(後)の月令(月令)より元日(元日)梅(梅)酒(酒)と服(服)すまの部(部)と却(却)  
 といふ(いふ)也(也)月令(月令)を産(産)すといふ(いふ)元日(元日)梅(梅)酒(酒)は  
 日(日)移(移)す又(又)礬(礬)部(部)といふ(いふ)度(度)信(信)す(す)正(正)礬(礬)也(也)  
 酒(酒)新(新)年(年)命(命)を(を)産(産)す(す)也(也)なり(なり)

○この日(この日)は(は)月令(月令)を(を)産(産)す(す)く(く)つ(つ)た(た)松(松)竹(竹)と(と)ま(ま)は(は)し(し)し(し)繩(繩)  
 と(と)ら(ら)る(る)の(の)よ(よ)は(は)豊(豊)に(に)ゆ(ゆ)つ(つ)り(り)繁(繁)産(産)す(す)こと(こと)か(か)ら(ら)

事(事)あり(あり)世(世)後(後)回(回)る(る)より(より)は(は)け(け)り(り)し(し)り(り)る(る)事(事)  
 海(海)に(に)き(き)る(る)一(一)條(條)の(の)處(處)に(に)封(封)す(す)る(る)事(事)あり(あり)し(し)り(り)る(る)  
 民(民)が(が)も(も)り(り)ゆ(ゆ)れ(れ)と(と)じ(じ)し(し)一(一)町(町)の(の)う(う)ら(ら)と(と)又(又)出(出)  
 法(法)より(より)り(り)て(て)つ(つ)と(と)并(并)す(す)一(一)く(く)ら(ら)に(に)あ(あ)り(り)し(し)  
 あり(あり)し(し)の(の)中(中)に(に)條(條)の(の)處(處)と(と)つ(つ)ら(ら)り(り)し(し)法(法)より(より)り(り)る(る)  
 づ(づ)か(か)ら(ら)あ(あ)り(り)し(し)の(の)門(門)に(に)あ(あ)り(り)し(し)松(松)竹(竹)と(と)ま(ま)は(は)し(し)し(し)り(り)る(る)  
 事(事)を(を)せ(せ)し(し)ら(ら)る(る)竹(竹)い(い)よ(よ)り(り)の(の)中(中)に(に)あ(あ)り(り)し(し)事(事)あり(あり)し(し)り(り)る(る)  
 一(一)年(年)の(の)始(始)の(の)終(終)を(を)り(り)し(し)と(と)し(し)て(て)ゆ(ゆ)る(る)一(一)又(又)世(世)に(に)あ(あ)り(り)る(る)  
 事(事)を(を)し(し)し(し)海(海)に(に)あ(あ)り(り)し(し)事(事)を(を)し(し)し(し)事(事)を(を)し(し)し(し)る(る)事(事)あり(あり)し(し)り(り)る(る)  
 れ(れ)い(い)し(し)し(し)繩(繩)お(お)か(か)ら(ら)り(り)し(し)り(り)る(る)事(事)を(を)し(し)し(し)り(り)る(る)事(事)あり(あり)し(し)り(り)る(る)









一年の天運と所運の風と云、知るべき程也  
 これ妖術よりし、倭軍の敗るるを詳記す  
 ○そも、今日、桃符と改換する事あり、  
 昔は、桃符と云ふれ、今と云ふ事と云、  
 此は、梅、うれと云ふの樹、ふ換る事、  
 桃符、梅、うれと云ふ事、  
 今と云ふ事、  
 海軍、  
 二社、  
 風俗、  
 夫あり、

梅、  
 桃、  
 符、  
 改、  
 換、  
 事、  
 あり、  
 昔、  
 は、  
 梅、  
 符、  
 と、  
 云、  
 ふ、  
 事、  
 あり、  
 今日、  
 は、  
 桃、  
 符、  
 と、  
 云、  
 ふ、  
 事、  
 あり、  
 梅、  
 桑、  
 歳、  
 時、  
 言、  
 卷、  
 一、  
 十一、



あふあきくまのふれはなれ人乃るる  
も家のふふきけ 那 室使百々二迎満園白  
作らるるくまのふれはなれ人乃るる  
まのふれはなれ人乃るる

元結の案且乃るり

一日今年始一奉 奉奉元 奉奉百々二  
興一年同

王新の元日の傍

燻作夢中一果深 勢風三版入 居福千門万戸  
勝日 総把新相換者各

宋若之り歳且れり

居間無実者早起 但如常 批板入 梅梅花漏  
果香甚風回笑語 重氣卜豊儀 柏酒何量熟  
心康素白長

○ 帯小紐使と業々 教定さればと免あふか  
今日よりくまのふれはなれ人乃るる  
之はくまのふれはなれ人乃るる  
心くまのふれはなれ人乃るる

○ 世俗よ今日終日屋中と掃塗せり 毛新  
来り湯室とくまのふれはなれ人乃るる

み難組の國代俗元日より又日まじ敷と  
漆の八輩に於て珍物より下石と名取  
室と名取りしこれ古く如死と實り  
を志るやり志るまじりこしよまじり  
侍りし見えたり

○と夕霽の飯と炊く竈は焼と煎す

○今秋末娘の交とまじり壽命と換むるす  
月令廣教よみえたり

立春の正月の節あり大要の後中又日中柄良の指  
と五穀のつよまじり始建也元日の正月の日代始也

立書い正月の氣の始あり一年代天運是より  
ちまじり時季也の始ありと改めると始と  
改くすししりりしちまじり善とすめ  
粥と食しと餅とくくは桃湯は浴する事か  
也つりし月令廣教よみえたり立書い  
ま 古今集よ書く

神祀らてむきしひあゆむとまじり  
くふりやせむとまじり 同集よ二葉の底  
あゆむらまじり多りしひまじり  
あゆむらまじり 同集よ源入

君のせよとくも氷れむしこにうらむるは  
る海のうつらぬ 新古今集よ接及大政大臣  
みのり 聖皇のまことなましく白雲のまろし  
けし小春のふたたり 同集より 儼成  
きやういふまゝなり ますもゆりまゝと都よ  
乃ここひひりか

曹松の五言の詩よ

玉燭傳佳節 湯和應北辰 土牛呈紫檢 綠燕  
表年春 臘寒星回次 意似月建宣 梅紀將  
柳 久 梅 思 越 鄉 心

黄玉林の五言の詩よ

五中名剛紙 白濤後來歲月 更茂犹余生  
度看新曆 又被喜風 減一年

張南野の五言の詩よ

徘徊氣映冰 霜少春到人 間多木 知俊勞 眼  
生 意 波 亦 風 吹 冰 綠 羞

○五言の詩より 紫餅造るくめくまぐいむら  
とろくらの黄雪のまろし 暮れすまろして 兜  
たしとるん 黄雪のまろし けり人のこゝろ 眼  
冬山 中をくまろし けり人のこゝろ 眼

ひも多し〜て園ありやと林ありは水あり  
かきされしとてその名をすへ〜  
た〜しやまは林あり又多し〜  
志多し〜是地氣乃かられるなるなり〜

○年ハ始メ奉子ノ破産乃〜  
世も我と忘れざるさあ〜  
猶礼とて正月又内裏あり〜  
〜あり若徳天皇は御宇より〜  
〜と〜しむ〜事古〜  
かほると〜し〜六年乃〜

年長せり人をらと射たり〜  
日本乃部あり毎正月一日必射教を記きり  
○又球杖うらりあり是密丸の眼と〜  
〜の儀は〜た〜の教は〜  
新羅神中抄十云十管孫英帝取密丸

毬之今毬杖是也〜  
國中毬事仍日本國學其例年始打  
毬杖云云い事たり〜  
是之儀附會の儀あり〜

○又あされふ女乃わらはれたの〜して樂

善子よ扱とつまき松とてけくるあり世後四谷  
 おひく是地テけりまの蚊よつれぬまじ  
 ちひるりまり林のらめ小楸樟といふ虫か来  
 ての蚊とつらまふ扱ありあはれこそよの樂華  
 子よととと人さうゆらゆらして扱とつけり  
 これと松はつらあままの落る何ちんさうか  
 里れちりぬりはく扱とおるまうしりぬあめ  
 一まのこころはさゆらかり えんごの扱と食う  
いまあぢやあうり  
 ○又お奇美業といふ事正月はあつじり一冬  
 正月十八日月乃比ちまの縮歌とく系中の

男おとこ女おんなをくつねとつてへて肉衰にくすいみく後河ごがわといひ  
 てちまのせしきりあり 中篇よりとる乃代一月十七日  
ちまより縮歌なり  
類書みしきも  
ちまより 持統天皇の治時を漢人縮歌と奏せし  
 ころいち源氏乃物治れかこころのうくるあり  
 ち海もかりまうし事さうい海風とてん  
 事よととつこち奇美業乃後河といひ  
 侍りたり臨舞乃舞人美春樂と奏せし  
 一い美業とくといひま 世後四谷  
みえより 今も系中  
 ありまの始り美業とてあはれととと  
 てこころい舞ありくありあまうていぬあり

傳美哉詩紀卷一

三十一



二日比日と拘日と多らく転が舞うに舞よ二月一日  
 と難し一二月と拘一三日と難し一四日と平  
 一又日と半と一五日と難し一六日と全一  
 八日と難し一七日の日晴る時を半ばの五六もの  
 休又く一八日付ハ思ひあつとるんをとも五九乃  
 生他日幾ハ妙押あつかり舞言をいひて天  
 乃大ぬる送と推多るハ縁と一海とくちあよ  
 似てく儼まわくお場多り事あるすや柱舞  
 くら元日玉人日来る不法時とくちハ俗  
 とかりく天鼓乃阿波方授礼して人抱たよ  
 舞せしはくちあよ

○今朝卯乃初よ起念の時よりりて難難とくち  
 冷内とのむと明初乃と一又温飯と念一  
 温飯乃むべ一このお初舞乃舞まけのせり  
 所せし今日明日行く舞ま一  
 ○今日戌家よを馬舞初わい  
 又子の初とあつハ  
 又弓射初鉄砲打初わく農家よ  
 又とと初わい舞まよあまひ初と一舟  
 一舟舞初と一  
 ○世俗よと舞初よ舞一男よい水とかりよ

あり乞へ永祿の法阿波乃三好り家原松本道成  
う姫女と我家乃詔旨よ妻あをせしり此  
と能初しころや幸ワも紫血氣の蒸るるな  
まろせくはいたかゆをとなし男とそこまひ病  
とせし一とて御園家よ及よろ何の後中  
酒食と客をせ辭絶して乳よ及よ子弟れ家  
乞食のやしき敷とるはうす父見も  
これと林の火一

三月今物飲食とらるり又昨日乃吉一元旦よ  
アと自よもまると難煮と食一是酒酒と  
のむ奴婢も又去り

五日霜降あり人そい比領内乃農人多く寒  
必飯糰酒肉と与ふ一一年の初れ客を家  
あよ分よ酒と美備と与ふ一農も世民の  
中たりろれ稼穡の功ふたりて男とや  
たふ事なれは早懸ありとこくはるる小す  
らば乞食地とたもの事と絶し是を年  
農功不びくゆとるり又遠路の商人多  
る大年乃急たりと古人もと

六日休活

七日 人日ひとひといふひ又また盃さき辰とちともともなり人ひと乃なり也  
 凡凡盃さき方かた也なりいいかかくくいいととやや利り倍ばいよりよりいいふふ也なり  
 の初はつより今日けふ七しち持ぢの菜さい粥じやくとと粥じやく一いち食くふふ七しち持ぢ  
 菜さいといいふふ也なり

せりからかみかみ形かたちももいいつつ傳つた乃なりををいいふふ也なり  
 志し乃なりここれれもも七しち持ぢ也なり  
又傳つた車くるまももいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
 延えん治ち十じゅう一いち年ねん正月しょうげつ七日にち後ご院いんより七しち持ぢの菜さいと

延えん治ち十じゅう一いち年ねん正月しょうげつ七日にち後ご院いんより七しち持ぢの菜さいと

いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

○又またいいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり  
又いいふふ也なり

とふ事又あり又礼記と書と東都のしりて書  
七足とらしむし足えけり又書と書と書と書と  
侍りの陽八張介り書と書と書と書と書と  
と書と書と書と書と書と書と書と書と書と  
ひくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
書と書と書と書と書と書と書と書と書と  
子物と書と書と書と書と書と書と書と書と

多通り人日寄杜二格遠行よ

人日越節寄草堂遥懐友人思故郷柳條弄色  
石思見梅花滿枝堪酌勝分在幸處無所不心  
携百更又後千慮今年人日元お思明年人日知妙又  
一臥未出三千春生知書劍典風塵沈迹遂忘二  
千石憶爾高苑有小人

○又更節介人乃懐よ正月と代よの日所よ  
少松と引く物と書と書と書と書と書と書と

子也日を侍聖人よ書と書と書と書と書と  
は書と書と書と書と書と書と書と書と

書と書と書と書と書と書と書と書と書と  
少年と書と書と書と書と書と書と書と書と

少くも五枚けりあり一梅屋丸の薬効を問ひて業  
者折返枝男七無二心為業飲之と傳ひたりあり  
一... しかる事なりと傳ひたりあり

八日 梅屋丸初より薬師傳は後徳と云ふ人今日その  
服どつちして宴と伝く又毎月八日薬師傳乃  
にカネ素性と食すものありこれ後唐氏れ  
後よまよひありと云ふ薬師傳と傳ひたりと  
云く製りたりと云ふ一徳農と云く醫者甚と云  
知ふ今世に傳ひたり醫術を徳免心承歴代多醫乃  
れ一あり後と伝ひたり徳農氏一と云く徳又醫者れ徳

徳少くせり... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
らん... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
醫徳と云ふ人もあり 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
大に命醫薬と云ふ一徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
家 國代醫乃り... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
家... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
師伝乃伝ひたり... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
つり八月に素食と云ふ徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
ま... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳  
多... 徳農氏一と云く徳又醫者れ徳



身てあつハ数程より然り及ハ室敷なる事ハ神  
察<sup>めが</sup>く事<sup>し</sup>行<sup>く</sup>と事<sup>し</sup>り事<sup>し</sup>れ<sup>る</sup>事<sup>し</sup>の<sup>事</sup>纏<sup>と</sup>と事<sup>し</sup>お  
な<sup>り</sup>く<sup>て</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>事<sup>し</sup>と<sup>事</sup>國<sup>保</sup>  
少<sup>く</sup>事<sup>し</sup>れ<sup>る</sup>事<sup>し</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>事</sup>ハ<sup>事</sup>保<sup>と</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>て<sup>事</sup>  
元<sup>元</sup>風<sup>保</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>て<sup>事</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>何<sup>れ</sup>事<sup>し</sup>  
事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>一<sup>一</sup>事<sup>し</sup>義<sup>事</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>ハ<sup>事</sup>保<sup>と</sup>事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>  
事<sup>し</sup>る<sup>る</sup>事<sup>し</sup>

日卒兼付記卷之一終

10001  
10000  
K11

10001  
10000

